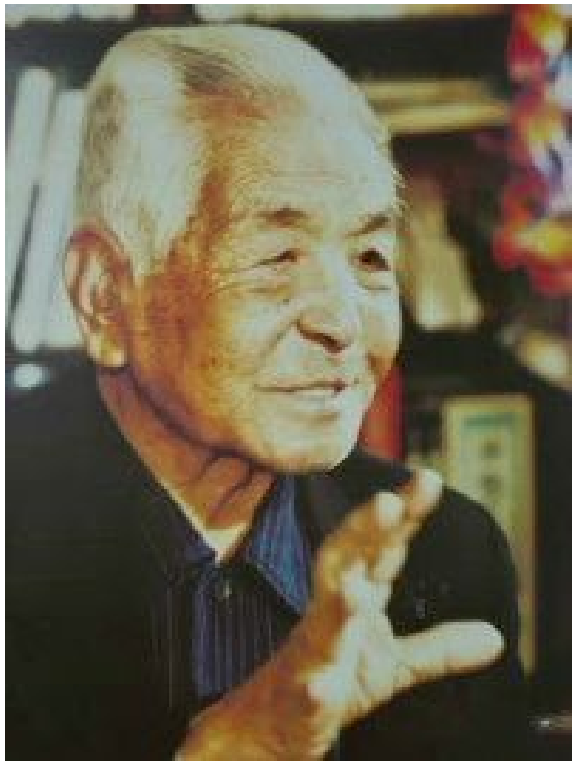
７９期岡山労働学校　第５講義

命どぅ宝・沖縄反戦のこころ



阿波根昌鴻

（あはごん　しょうこう）

2010年6月17日

岡山県労働者学習協会　長久啓太

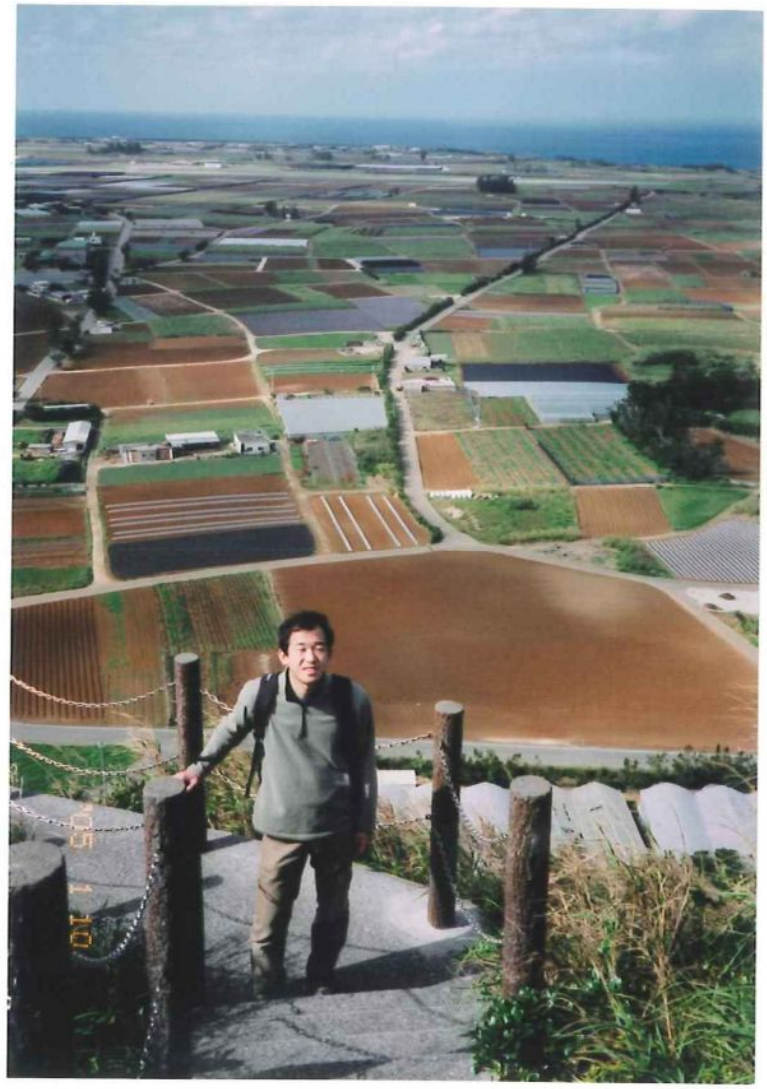
はての浜（久米島）はこんなところ・・・

本日のメイン・伊江島はここです

私と、阿波根昌鴻（1901年～2002年）さんとの出会い

２００５年１月に伊江島に旅行

タっチュー（城山）から島全体を**360**度見渡せる。「平らな島やなー」



反戦平和資料館「ヌチデゥタカラの家」を訪れる

謝花悦子さんから、

阿波根昌鴻さんのお話を
１時間ぐらいかけてじっ
くり聴く。

そのお話は、

まさに心揺さぶられ
るものだった。

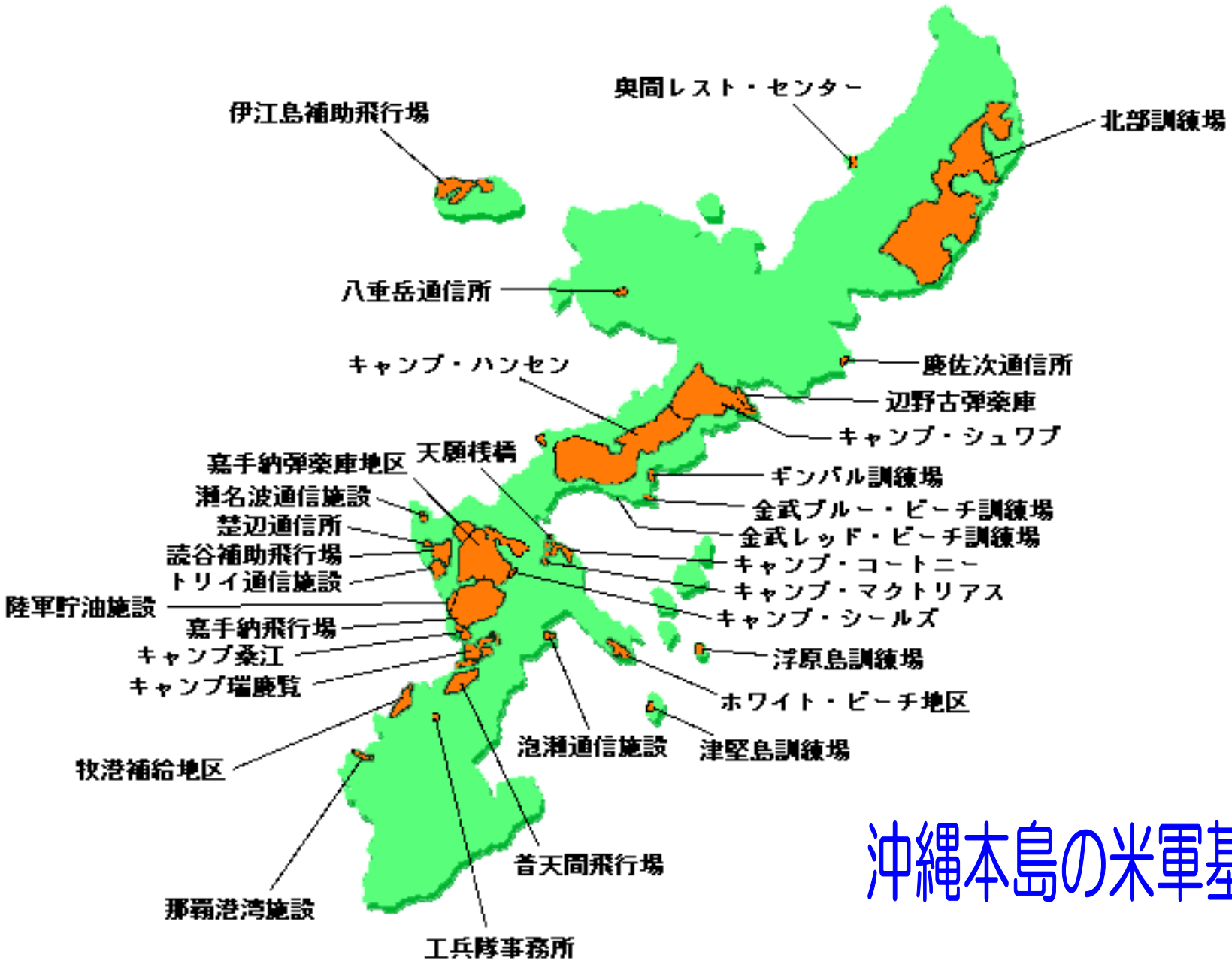
こんなスゴイ人がい
たんだあああぁ！！
出会っちゃった☆

阿波根昌鴻さんの話に入る前に・・・

鳩山首相辞任の一番の理由になった普天間基地問題・・・

そもそも、

なぜ、沖縄に米軍基地が集中しているのだろうか？


伊江島補助飛行場
奥間レスト・センター
北部訓練場
八重岳通信所
キャンプ・ハンセン
慶佐次通信所
辺野古弾薬庫
キャンプ・シュワブ
嘉手納弾薬庫地区
天願桟橋
ギンバル訓練場
瀬名波通信施設
金武ブルー・ビーチ訓練場
楚辺通信所
金武レッド・ビーチ訓練場
読谷補助飛行場
キャンプ・コートニー
トリイ通信施設
キャンプ・マクトリアス
陸軍貯油施設
キャンプ・シールズ
嘉手納飛行場
浮原島訓練場
キャンプ桑江
キャンプ瑞慶覧
ホワイト・ビーチ地区
泡瀬通信施設
津堅島訓練場
牧港補給地区
普天間飛行場
那覇港湾施設
工兵隊事務所

沖縄本島の米軍基地・・・

１９４５年　沖縄戦・・・　４月１日に沖縄本島に米軍は無血上陸

◇「国体護持」のための「捨て石」としての沖縄
◇２０万人以上の死者・・・
　＊約半数が一般住民。米軍も１万数千人の死者。
　＊鉄の暴風、軍民一体の地上戦、日本兵による住民虐殺
　＊学徒隊の悲劇、「集団自決」（集団死）、戦争マラリア

沖縄は、米軍の占領下に

沖縄住民の戦後は、１６か所の収容所から出発。米軍は自由に基地を整備した。

＊白地図に線を引くように広大な軍用地を接収

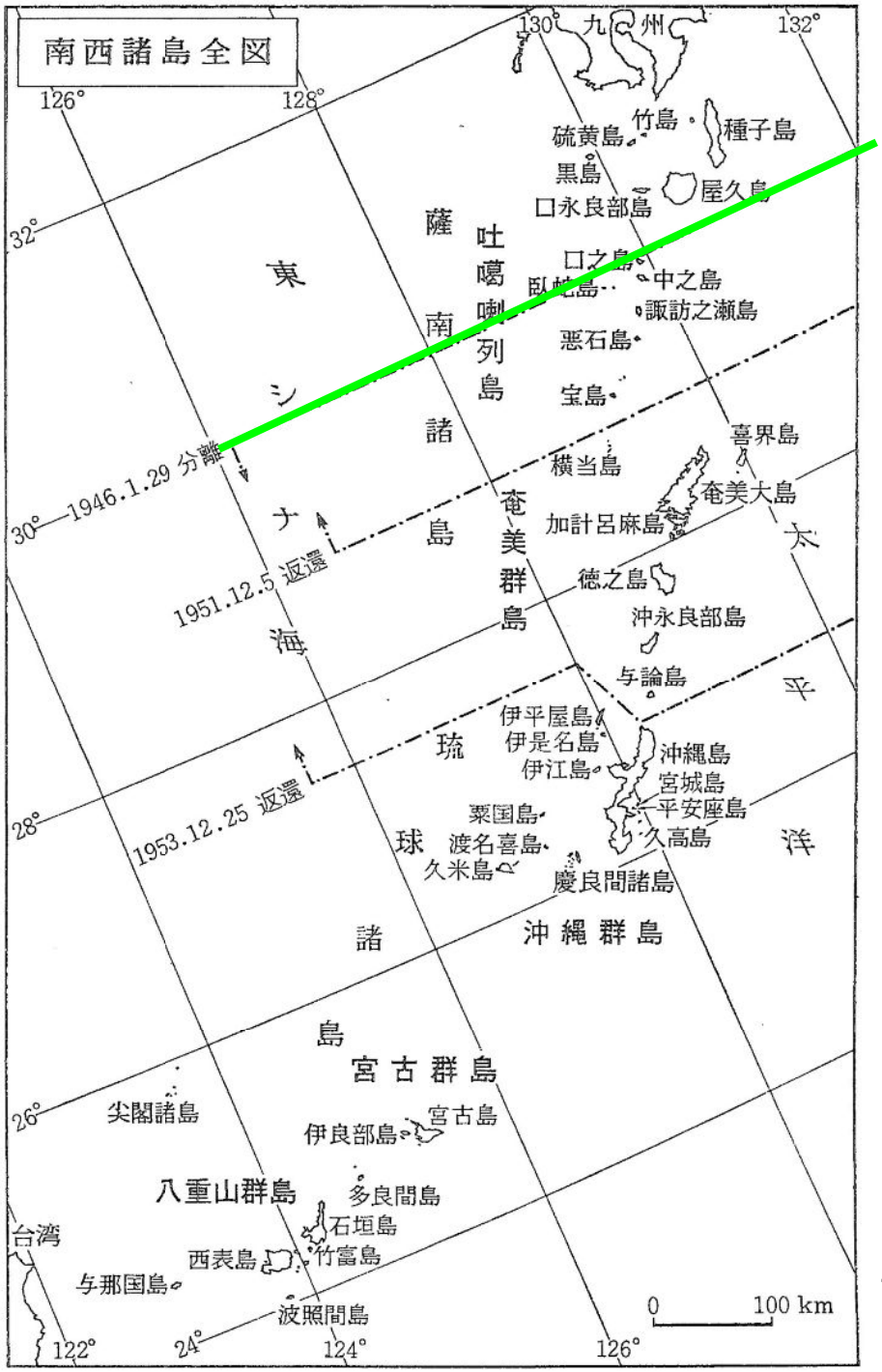
＊例えば嘉手納基地は、日本軍がつくった中飛行場を約４０倍に拡大したもの。

１９４６年１月２９日、連合国総司令部（ＧＨＱ）「若干の外郭地域を政治上行政上日本から分離することに関する覚書」を出す。北緯３０度以南の南西諸島を日本から分離することを明らかにした。

北緯３０度以南は日本から切り離される･･･！

＊１９４７年５月３日、日本国憲法が施行されるも、北緯３０度以南は、憲法は適用されない地域だった。

＊平和憲法は、沖縄の犠牲のうえにそのスタートをきった。



アジア情勢の変化。反共の砦として、沖縄の恒久的な軍事基地建設がはじまる。

１９５０年、朝鮮戦争勃発。

◇サンフランシスコ講和条約第３条

＊１９５１年９月８日、対日講和条約が調印される
・同じ日、安保条約も調印

【３条】日本国は、北緯二十九度以南の南西諸島（琉球諸島及び大東諸島を含む。）、孀婦(そふ)岩の南の南方諸島（小笠原群島、西ノ島及び火山列島を含む。）並びに沖の鳥島及び南鳥島を合衆国を唯一の施政権者とする信託統治制度の下におくこととする国際連合に対する合衆国のいかなる提案にも同意する。このような提案が行われ且つ可決されるまで、合衆国は、領水を含むこれらの諸島の領域及び住民に対して、行政、立法及び司法上の権力の全部及び一部を行使する権利を有するものとする。

＊１９５２年４月２８日、対日講和条約、安保条約が発効
・沖縄が、無期限に、日本から切り離された日。
・核の自由もちこみ、軍事最優先のもとにおかれた沖縄。

◇銃剣とブルドーザーによる土地接収（基地拡大）
＊沖縄支配の合法的根拠を得たとする米軍は、徹底した軍事優先政策と反共政策をふりかざし、軍用地の強制接収や政治的弾圧を強行していく。
＊住民の抵抗を武力で排除しての基地拡張建設
・土地の強制接収

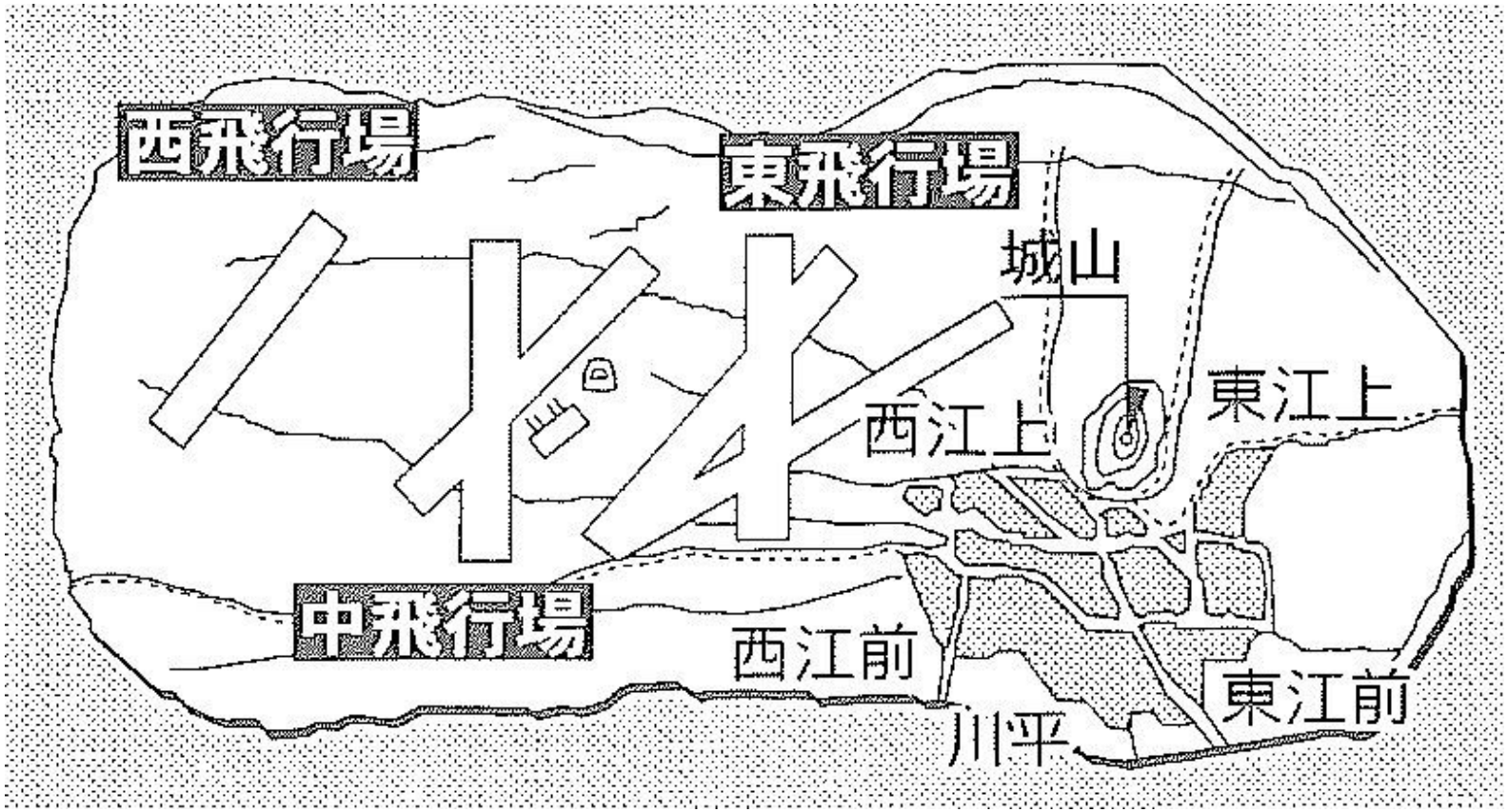
それからの歴史は省略しますが・・・

以後、１９７２年5月１５日まで、沖縄は米軍の統治下におかれた。

そして、日本への復帰は、安保体制に沖縄をしばりつけるものだった。

沖縄戦の「縮図」、伊江島・苦難のあゆみ

≪１９４３年　７月≫　日本軍が伊江島飛行場建設をはじめる
（村民多数動員）
≪１９４４年１０月１０日≫　はじめての米軍空襲（村民４０名死亡）
≪１９４５年３月上旬≫　完成目前の飛行場の破壊命令が出る



≪１９４５年4月１６日≫　米軍上陸。戦車８０台、兵１０００人。
≪１９４５年4月２１日≫　米軍、伊江島の占領を宣言。
村民の死者約１５００名、日本軍の戦死約２０００名。
米軍の戦死約３００名。

沖縄戦 64年

当時の状況を
いまの情報、視点で構成

沖縄戦新聞

第8号 1945年（昭和20年）4月21日 土曜日

沖縄戦新聞は新聞の体裁を取り、日付は本来なら米軍が伊江島を占領した翌日の4月22日とすべきですが、当時を再現するために21日付としました。また、紙面には21日前後の関連する出来事も併せて掲載しました。

米軍が伊江島占領

住民1500人が犠牲
日本軍守備隊は壊

女性も総攻撃に参加

日米の戦闘で焼かれる伊江村の集落（1945年、米軍撮影、琉球大学図書館所蔵）

沖縄守備軍

琉球新報

「沖縄戦新聞」

≪１９４５年5月≫　戦死や「集団死」、自爆から生き残った島民2,100人は慶良間島へ強制移送され、米軍は伊江島に新たな飛行場や施設を建設。

≪１９４７年３月≫　伊江島民に帰島の許可があり帰村開始。しかし、伊江島には緑はなく、村や家屋一軒もなく、あるのは縦横に走る自動車道路と無数の米軍施設だった。村民は仮テント生活を余儀なくされる。

≪１９５３年7月≫　米軍が理由を騙して真謝区の土地調査。

≪１９５４年6月２０日≫　米軍、工事着工。４戸を立退かせた。工事終了と同時に爆撃演習開始。

≪１９５４年8月２０日≫　米軍、射撃場拡張を通告。これには、真謝区の全部と西崎区１４２戸のうち７４戸がふくまれる。

戦争遺跡を
「沖
戦後
争に
歩ん
第502特設警備工兵隊出撃の地
北部出身の防衛隊員でつくる第502特設警備工兵隊は、米軍上陸の1945年4月16日から毎晩、計約800人が米軍に斬り込み攻撃を仕掛けた。戦死者数は不明。
旧米軍射爆場
垂直離着陸機・ハリアーパッド基地
湧出
西江上
米軍飛行場
団結道場
伊江補助飛行場
伊江島空港
伊江村
城山
農民道場
アハシャガマ
伊江島
カントリークラブ
東江前
山グシの陣地壕
公益質屋跡
伊江村中央公民館
伊江小
伊江中
芳魂之塔
伊江村役場
川平の第2小隊壕
西江前
米軍上陸地点
アーニー・パイル記念碑
西小
川平
ニィヤティヤガマ
米軍上陸地点
米軍上陸地点
被爆慰霊碑
米軍上陸地点
伊江港
西崎漁港
製糖工場
ヌチドゥタカラの家
わびあいの里
は射爆場内軍用地
は住宅・畑・道路として住民の使用が黙認されている軍用地

≪１９５５年3月１１日≫　米兵３００名。三隻の大型上陸用舟艇で伊江島に上陸。

≪１９５５年3月１２日≫　真謝部落で米軍測量開始。

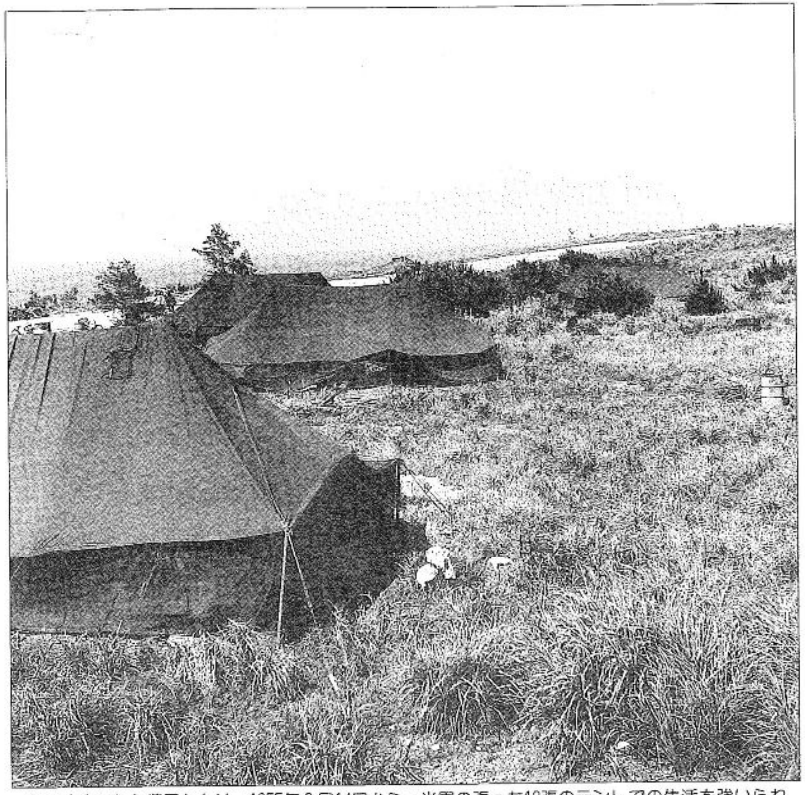
≪１９５５年3月１３日≫　住民は、上陸した米軍部隊との交渉に見切りをつけ、８名の地主代表が朝から那覇の琉球政府にかけつけて座り込み陳情を開始。

≪１９５５年3月１４日≫　米軍、農家・家屋に対し強制破壊。この夜から、米軍の張った１３枚のテント幕舎生活がはじまる（７７名収容）。

≪１９５５年3月１５日≫　測量をほぼ終了。鉄柵をはりめぐらす。

最初の米軍の看板：1955年３月、米軍は強奪した土地に鉄線をはりめぐらし、爆撃演習を開始した。（『人間の住んでいる島』より）

米軍が強奪した土地に鉄線をはりめぐらし、爆撃演習を開始する。


家を破壊された農民たちは、1955年３月14日から、米軍の張った13張のテントでの生活を強いられた。（『人間の住んでいる島』より）

真謝部落の農民は、米軍が張った１３枚のテント生活を強いられる。

テントでの生活：毒蛇のハブの侵入にも気を配り、日中の暑さで食物は腐りやすく、雨がふると水浸しになった。（『人間の住んでいる島』より）

テント生活を余儀なくされる。

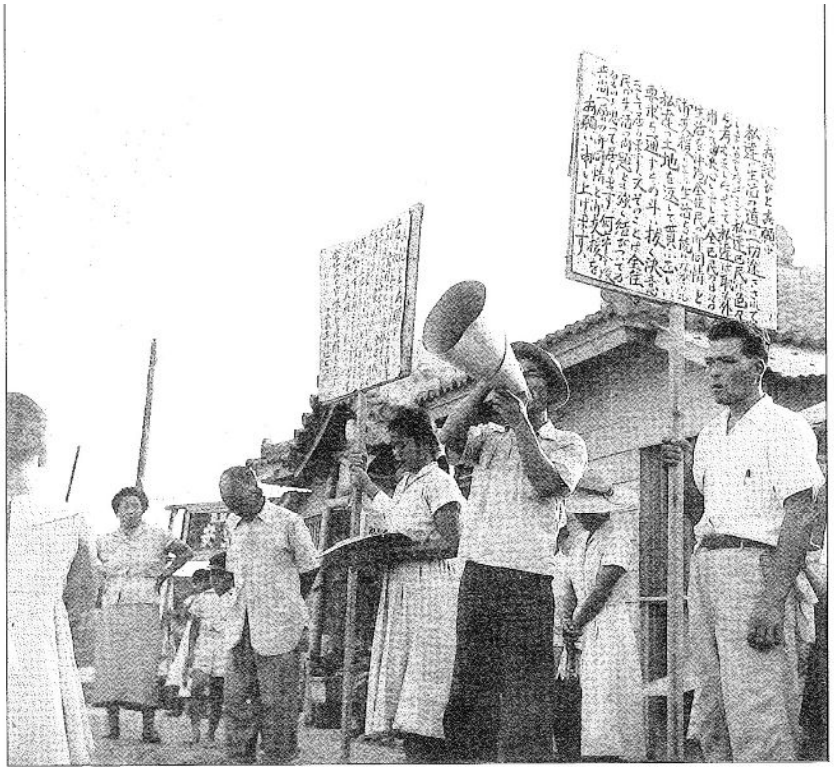
≪１９５５年4月３０日≫
伊江中学運動場で土地返還要求村民大会。柵の撤去、演習中止、損害賠償を決議。

≪１９５５年5月9日≫　米軍、爆撃演習再開。

≪１９５５年7月２１日≫
真謝区民大会。部落全体が、生きる為、また世間に実情を訴えるために乞食となることを決定。沖縄本島を横断する乞食行進が開始される。５６年の２月までこの行進は続く。

お詫びとお願い

「私達の生活の道は一切途ざされてしまいました、そこで私達区民は色々と考えました、そして私達は外聞もなく決心しました、全区民の日々の生活を、沖縄全住民の御同情とご支援により生活を続けながらも、たたかい抜く決意をして居ります、又その事は全住民の生活の問題とも強く結びついているものと思って居ります、何卒今後共尚一層の御同情と御支援をお願い申し上げます」



「土地は取り上げられ、多くの子供等を抱へ食料はない、泥棒すれば子供達は刑ム所に収容せない、全区民が生きるには、乞食以外にない、併し乞食も法にふれると云う、武力にはかてない、願ひは通されない、乞食するのは恥であるが、武力で土地を取り上げ、乞食させるのは、尚恥です、泥棒された人も責任があるが、泥棒した人程には恥でない、全住民皆様の御理解を乞ふ」　伊江島真謝地主一同

陳情口説（ちんじヨうくどウち）
を歌いながら・・・

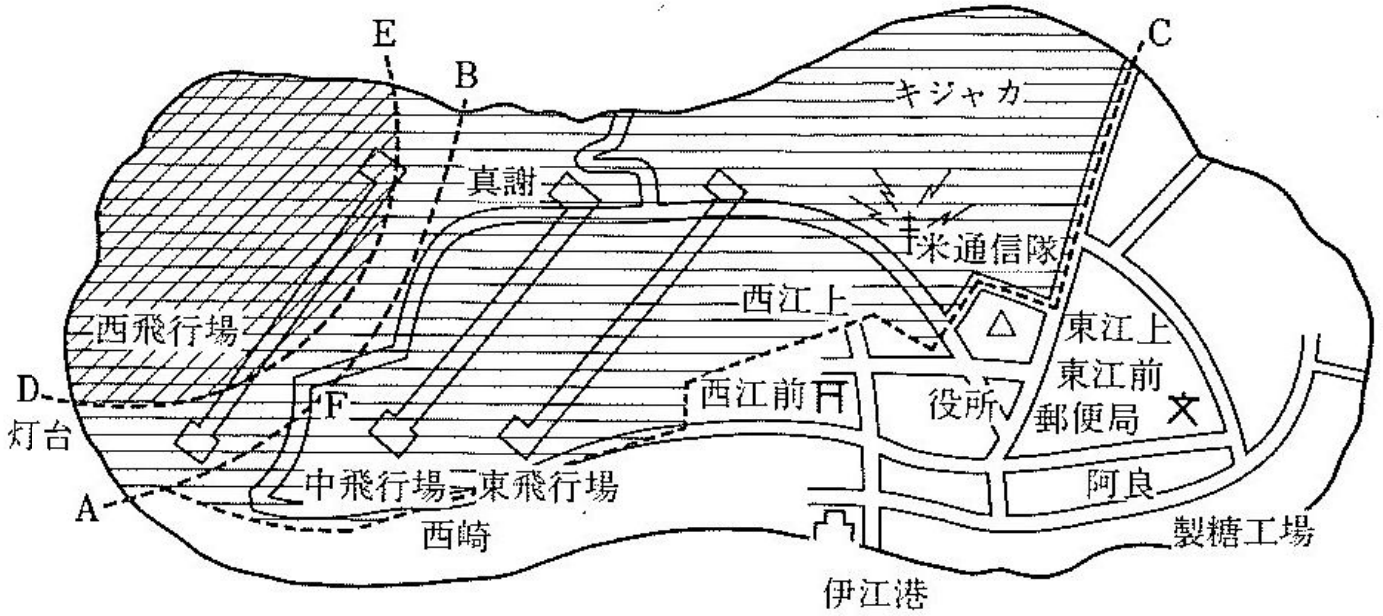
1956年・沖縄の「島ぐるみ闘争」の導火線に

那覇　平和通り
での乞食行進。

米軍の激しい爆撃演習の下でも、真謝の農民たちは実力耕作をやめなかった。たとえ基地内であっても、自分たちの畑を耕さなければ生きていけなかった。

子どもたちの生活は、危険な滑走路・米軍の演習の中にあった。

以後、米軍と農民のたたかいは続く。伊江島の創造的なたたかいの記録は、阿波根昌鴻さんの著書『米軍と農民』（岩波新書）に詳しい。農民の不屈のたたかいで、伊江島の軍用地は、最初島の６３％であったものを、約２７％に後退させた。

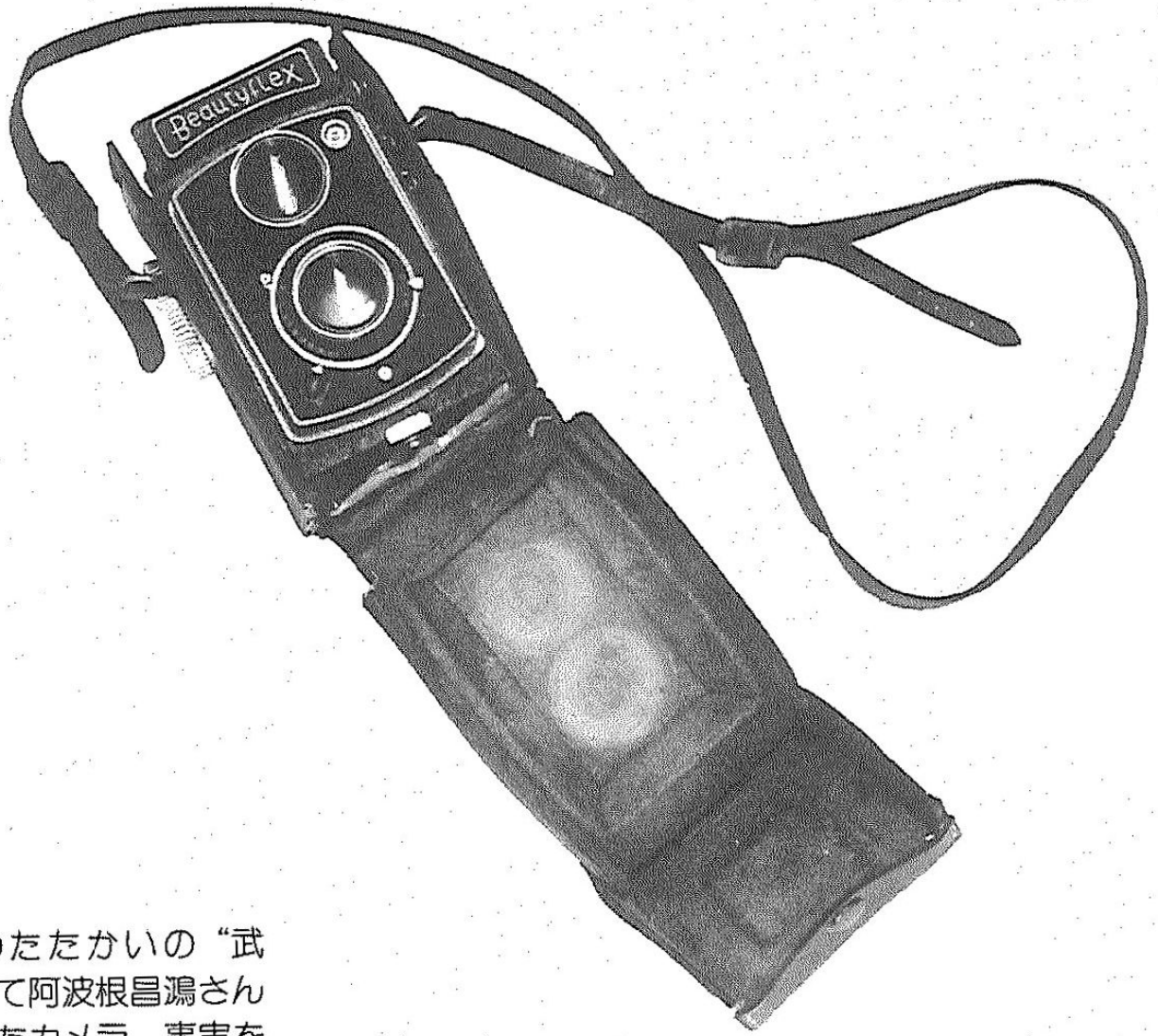


(上)伊江島遠景．城山の左手前が伊江港．1992 年撮影．
(下)伊江島の基地変遷図(復帰前)．農民のたたかいによって米軍は演習地を A－B 線から D－E 線に後退させ，D－E 線にコンクリートの標識を立てた．米軍は A－C の軍用地はいぜんとして確保し，演習地拡大，ミサイル持ち込みなどの条件を残していたが，A－B 線における農民のたたかいによって，A－C 内の通行の自由を米軍は最初から認めないわけにはいかなかった．金網も張れなかった．

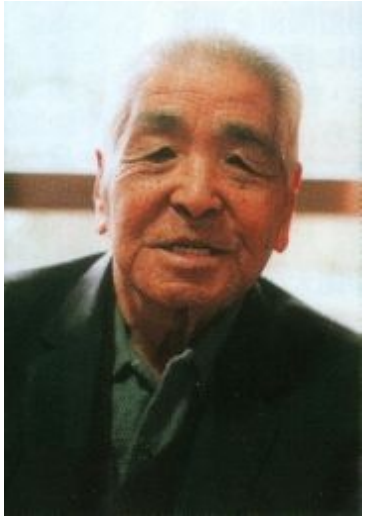
伊江島土地を守る会
団結道場
米軍に告ぐ
一、土地を返せここは私たちの国
私たちの村私たちの土地だ
一、侵略者伊藤博文東後の悲劇に学べ
汝らは愛する家族が
米本国で待っている
一、豊なる農民の忠告を聞け
さらば米国は永遠に栄え
汝らは幸福に生きのびん
○剣をとる者剣にて亡ぶ（聖書）
○基地を持つ国は基地にて亡ぶ（歴史）
一九五五年五月
伊江島土地を守る会
演習地を直ちに撤去せよ！
再び戦争の犠牲になるな！
伊江島には核模擬
爆弾の演習基地がある
'05 1 10

◇阿波根昌鴻さんとは

＊１９０３年、沖縄本島の上本部村（現・本部町）に生まれる。
＊１９２５年、移民募集に応じてキューバ、のちにペルーにわたり、１９３４年帰国。京都一燈園に西田天香氏を訪ねた後、伊江島に住む。
＊１９４５年沖縄戦で一人息子を失い、戦禍をまのあたりにして、反戦平和のために闘うことを決意。米軍占領下の伊江島の土地闘争では常に先頭に立った。
＊復帰後も、一貫して軍用地契約に応じない反戦地主として闘い、８４年に建設した反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」を主宰して、反戦平和の実践を続けた。２００２年3月２１日没。



非暴力のたたかいの“武器”として阿波根昌鴻さんが使用したカメラ。事実を記録し、伝え、残す写真の威力を阿波根さんは知っていた。（ヌチドゥタカラの家の展示）



阿波根昌鴻さんの言葉から

「わしは、一人息子が沖縄で死んだ・・・なぜわしが、これほど平和運動に熱心に取り組んでいるのかといえば、何よりこの体験である。地球ともかえられない、たった一人の息子を戦争でとられて殺された。その何物にもかえられない息子を失った親としての痛苦の思い、これが基本にある」

命どぅ宝

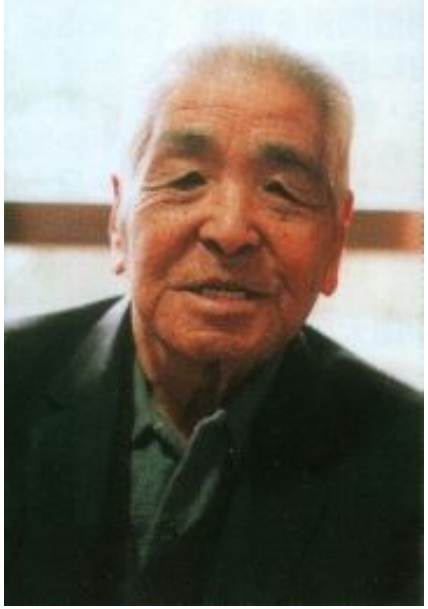
「人類の不幸のすべては、戦争準備と戦争が作るものである
　戦争さえなければ、人類に貧しさも犯罪も争いも不幸も無いことを確信しております
　戦争（殺し合い、奪い合って、瞞し合って生きる人間のこと。）
　平和（助け合って、ゆずり合って、教え合って、共に生きる人間のこと。）」

「つい最近のことですが、戦争で父親を亡くした親子が泊り込みで、わしのところに来ました。その人は、私たちも戦争で親を亡くしたが、何十年もたったことであり、諦めるしかない、諦めが肝心だ、いつまでも戦争のことを考えているのはどうか、という。

わしはこう答えました。あの戦争が最後でもう終わりということであれば、これは早く忘れた方が自分のためになる。しかしいま、これまで以上の軍備をし、演習をし、沖縄県民はいろいろな事件や事故にあって、ひどい目にあっている。戦争で死のうが、演習で死のうが、かけがえのない人ひとりの命であることにかわりはない。戦争をするための準備と演習のために殺され、死んでゆくということがなくなるまで、戦争の悲惨さをいいつづけ、平和のために行動を実践しつづけなければならない。しかも、今度戦争が起きたとしたら、核で地球は全滅。わしらの時代はともかく、次に生まれてくる子どもたちのために、地球を破滅させるようなことをさせてはいかない。すべて命、命あってのことなんだ。命より大事なものは無いんだ。その命が戦争によって、こんなにも奪われてしまった。もう二度とこんなことがあってはいかないー

この親子に話したことは、戦後ずっと考えてきたことでありました。そして、わしが反戦資料館をつくろうと思った心の底にある思いであります」

阿波根昌鴻さんから学んだこと



反戦運動の姿勢

相手のことを考える闘い

「道理をもって相手を説得する、決して責めているだけではいけない、相手の立場に立って相手も幸せにする、そういう考え方でなければならない」
「自分たちの目的は基地撤去であり、土地をとりもどすことです。喧嘩することではない。だから、銃剣を持って来る人の立場も考える。この兵隊たちは命令に従うしかない人たちで、可哀そうだという同情心がなければいかない」

＊辺野古のたたかいに受けつがれている『非暴力』の闘い

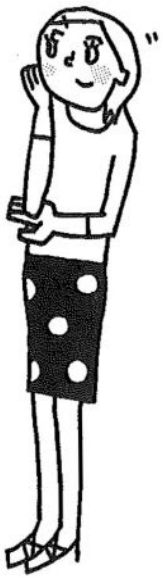
阿波根昌鴻さんの言葉から

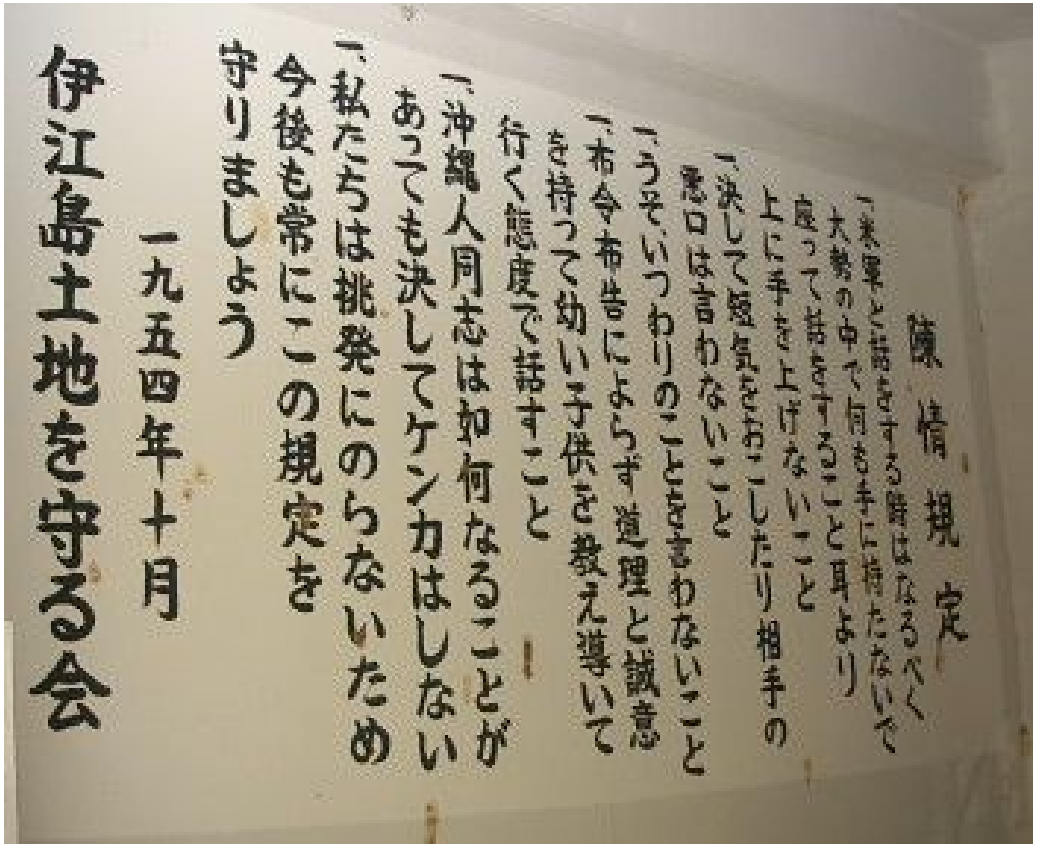
◇米軍にたいして

「わしらには米軍に悪口をいう権利はないし、資格もない。米軍が沖縄、そしてこの伊江島にきたのは戦争があったからですよ。その戦争はだれが起こしたか。日本が起こした。戦争がなければ米軍は来ていない。日本が米軍は沖縄に来て下さい、伊江島に来て下さい、そういったのと同じである。わしらは日本人としての責任がある、そう思っております。だから悪口はいわない。そういう闘い方はしない。わしらは『鬼畜』ではない、人間である。人間として闘いをやるのだ」

「あいさつさびら」（あいさつしようねえ）

「相手が鬼畜ならこちらは人間。人間なら朝は『おはよう』、昼は『こんにちは』、晩は『今晩は』とあいさつする。だから『鬼畜』と会うときもあいさつをしよう、相手が答えようが答えまいがあいさつをしよう。そしてこれが伊江島のたたかいの出発点であり、心がまえでありました」

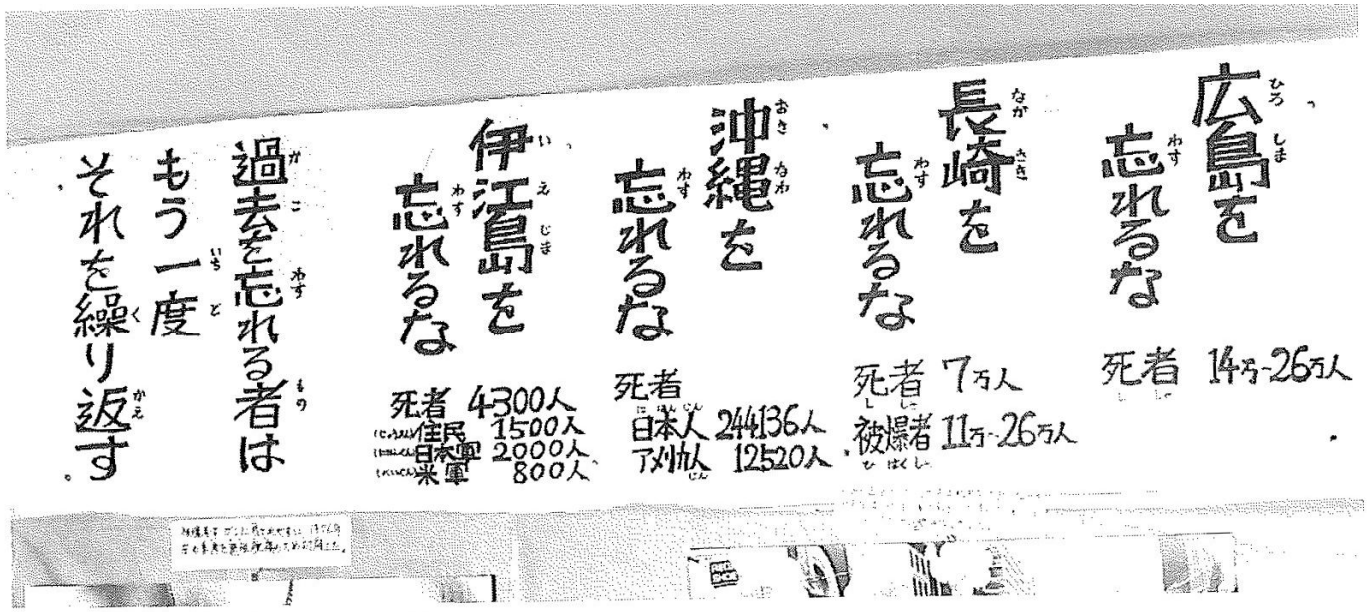




「本土からきた青年で陳情というのはあまりにもおとなしいといった人がおりました。陳情というのはたたかいではないと思っているようでありました。わたしは、その青年にこう説明しました。『かならずしもすぐれたたたかいとは思わない。だが、支援団体も、新聞記者も、見る人も聞く人もいないとき、この離れ小島の伊江島で殺されたらおしまいだ。これ以外に方法はない。』　無抵抗の抵抗、祈り、おねがい、悲願、嘆願、わしらはひたすらこれで押して行きました」

◇反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」について

「いまあるほとんどの資料館はどこでも、戦争は残酷だ、もう二度としてはいけないといっておりますが、その残酷な戦争は誰がどうしてつくったのかということに、まったくふれていない」
「戦争はどこが始めたかということからはじめて、戦争の残酷さと、戦争の結果からくる悲劇を展示しようと思いました。さらにそのためには教育のこと、戦争準備のこと、戦争をおこした『英雄』たちの悲劇のこと、ここまでさかのぼって展示しなければ、本当の反戦資料館にはならない、そう考えるようになっていった」



「ヌチドゥタカラの家」の展示。

資料館には、生々しいものが所せましとぎっしり。

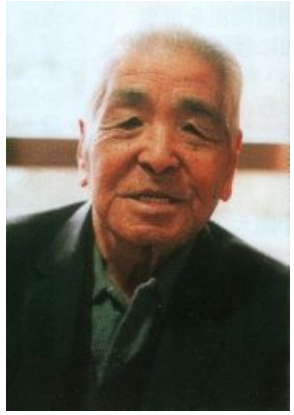
すべて阿波根さんがたたかいのなかで収集してきたもの。

わびあいの里には、「やすらぎの家」と「ヌチドゥタカラの家」の二つ施設があります。

「やすらぎの家」は、身障者、健常者、お年寄り、子どもらが、互いに生きがいを求め、助け合い、能力に応じて生産につとめ、心づくり、体づくりのためのやすらぎの場として建てられました。ここは、故阿波根と平和運動を共にしてきた館長の謝花が里を訪れた人たちに、平和を語る場所でもあります。

「ヌチドゥタカラの家」は、同年12月8日に開館しました。平和のためには戦争の原因を学ばなければならないという阿波根の考えを具体化したもので す。人間の生命を粗末にした戦争の遺品と平和のためたたかった人々の足跡を紹介しています。土地闘争の中で収集した米軍の爆弾、原爆模擬爆弾、鉄線、標識や戦争直後の生活用品や闘争を記録した写真や土地を守る会の旗などを展示しているほか、戦死した日米の兵士を慰霊した「無縁洞」が安置されています。

（わびあいの里ホームページより）



阿波根昌鴻さんの言葉から

◇土地を守るたたかいを通して

「土地をとり返すための闘いを続ける中で、わしらはいろいろなことを学び、考えました。米軍の中にはいい人もおる。赤ちゃんにミルクを飲ますやさしい人もおる。それなのに、なぜわしらの土地を強奪するというひどいことをするのか。これは戦争があるからである。戦争が人を変えてしまう。そして基地は、その準備をするためのものだ。基地が撤去されるまでは、戦争のことを忘れてしまうことはできない。わしらの土地を守る闘いは、戦争をやめさせ平和をつくることにつながる、またつながらなければいかない。そう確信するようになった」

「基地からくる『こぼれ金』に頼らないと村の経済が成り立たないというのは、長い目でみればいいはずがない、そんないびつな経済は経済としても不健康で危険なことであります。それだけでなく、何でも金を優先させる考えは人の心を毒してしまいます」

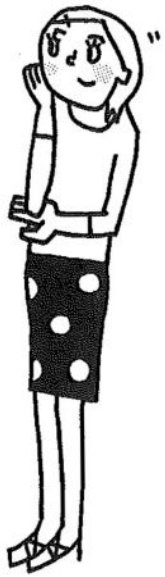
「わしらの平和運動は、沖縄から基地を無くしても終わらない。日本の平和憲法を、世界中で実現させて、世界中の武器を全部なくす。そして、地球上の資源を、地球上の生き物が、平等にバランス良く分け合って、生きてゆけるような社会にするまでは、平和運動はやめられない」

「軍事力を強化する国は、国民を苦しめる悪い国であります。それに武器に頼って生きる人間より不幸な人間はおりません。・・・基地はアメリカ国民のためにもならない、もちろん私たちのためにもならない、このことを確信している」

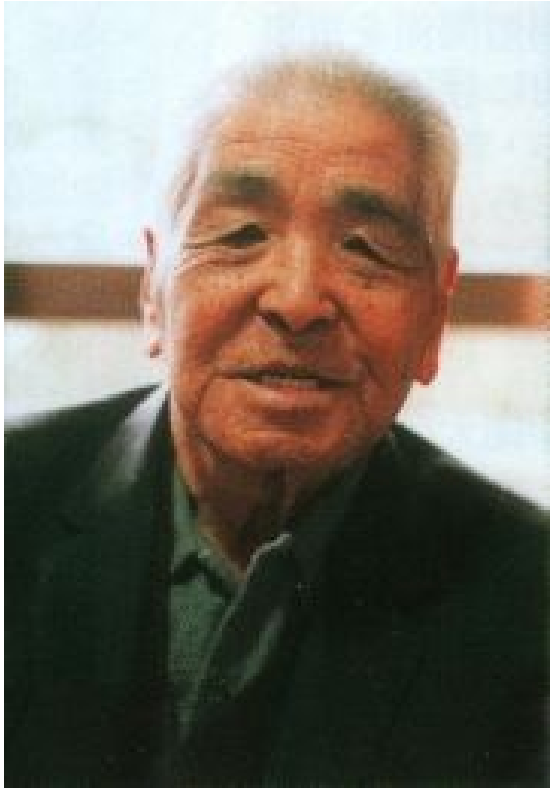
「アメリカ人と話し合う時には、いつもキリストを前に出して方がいい。キリストの後にかくれていると、キリストが闘ってくれる。私たちは三〇年あまり闘っているが、アメリカの上の人から、間違っていると言われたことは一度もない。またアメリカ人にこんな事を言ったことがある。『日米安保条約は日独軍事同盟より危険だ。こんな条約を結んで恥ずかしいとは思わないか。どちらが正しいか裁判でためしてみよう。アメリカからキリストをつれて来なさい。私たちはインドからお釈迦様をつれて来る』」

「私たちは米軍に土地を取られ、米軍とたたかってきましたが、そのときもそれ以後も、他を責めない、長所と交わる、友と友、人と人、国と国、不義を正し、ソ連とも、アメリカとも仲良く、ゆずり合って、助け合って共に生きる、その実践のなかに真の平和と真の人間の幸福はあると確信いたし、その実践に努めてきました。

私たちが戦争と米軍との闘いで学んだことは、武器の力に頼って生きる人間の限りない不幸と、良心に頼って生きる人間の限りない幸福であります。そこで平和運動とは、幸福の人が不幸の人に幸福の道を教え、導いてあげることであると確信を持つようになりました。米軍との三十余年の闘いで、米国民の不利不幸になることはやらないように努めてきました。私たちが闘わなければならないのは、戦争をやりたがっているアメリカと日本の、人間の顔をした悪魔に対してであります」



阿波根昌鴻さんのすごいところ

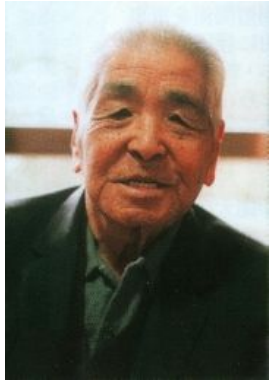


「平和の武器は
学習である」

「わしらは、いろいろな人に援助してもらいながら闘いの中で学びました。そして闘いがすすむ中で、勉強することが闘いの大事な一部であることを確信し、もっときちんとした勉強が必要であると考えるようになっていった。それで６１年、『人材養成有志会』というものをつくって、東京にある中央労働学院という学校に、村の青年たちをおくって勉強してきてもらうことにしたのであります。復帰までに、合計１５、６人の青年が行きましたかね。

　ところで、この活動は、わしにとっても大きな意味をもつことになりました。帰ってきた青年に、わしの考え方は観念的だと批判されたりして、だんだん話があわなくなった。これはいかないと思って、今度はわし自身が学校に行ってみようと思ったのであります。６６年ですから、わしは６３歳でした。勉強に行って、びっくりしましたことがいくつもありましたよ。たとえば、賃金論というものを教えられた。昔の教育では、貧乏というのは、その人が悪いか、または祖先に悪い人がいたためだといわれて、疑ったことがなかったのに、そうでないことがわかった。いろいろなことがわかった。いろいろなことがわかっていく、というのは実に大きな楽しみであります。先生のいわれることは全部ノートしました。そのときのノートは３１冊あります」

阿波根昌鴻さんの言葉から

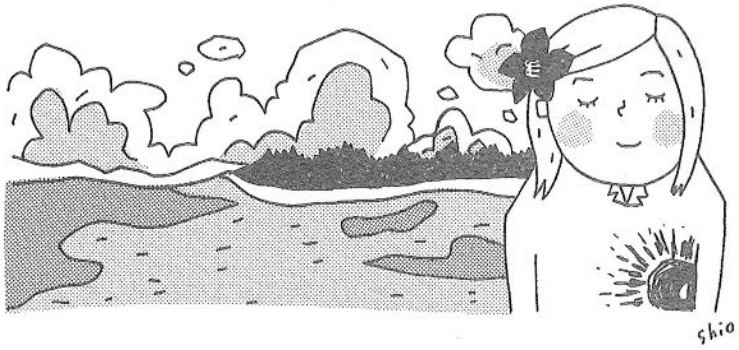


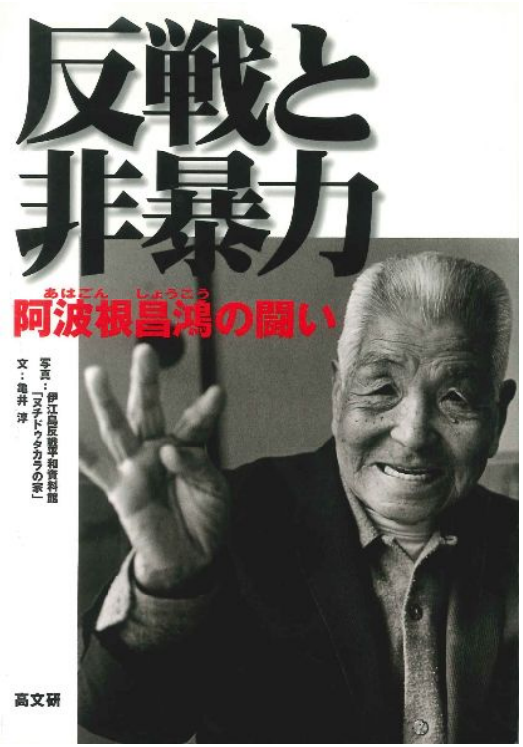
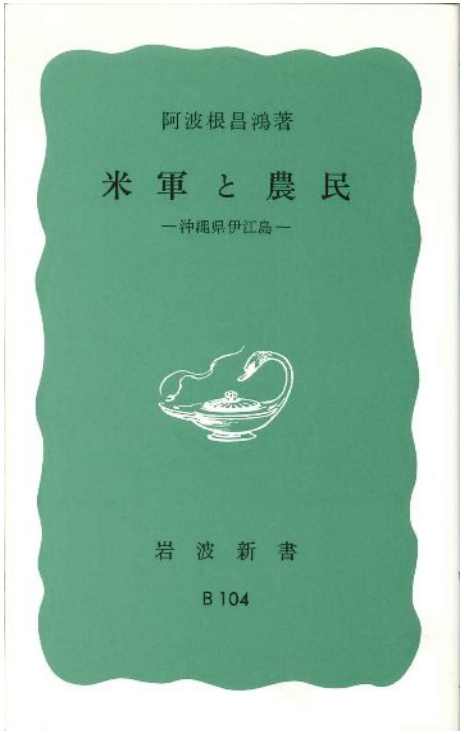
◇人生観・世界観
「土地は魔法使いのようだよ。同じ土にいろんな種をまくといろんな命を育ててくれる。 命はぐくむ土地を、人殺しの練習のためには使わせない。土地は万年。金は一時」

「この伊江島はね、海も動いているし、生きておる。こうして木を見ていますとね、風は三味線ですよ。静かな三味線をひくと、木の枝はみな、クミウルイ（組み踊り）する。あれは王様の前で踊るおどりですね。三味線という風が力強く吹くと、沖縄のカチャーシー、庶民の元気踊り。そして、木によって、踊り方がみな違う。木の葉が大きい木の踊り、木の葉の小さい木の踊り、みな違う。それも見事。

天を見たらですね、雲がどんどん動いて、いろいろなかたちに変わる。舟になったり、ライオンになったり。それもまた見事。

何でも生かしていかなければならない。戦争がない平和の島をどうしてもつくっていかなければならない。わたしはそう強く思っております」



≪伊江島と阿波根昌鴻さんについて詳しく学びたい方は≫

『米軍と農民ー沖縄県伊江島』（阿波根昌鴻、岩波新書、１９７３年
『命こそ宝ー沖縄反戦の心』（阿波根昌鴻、岩波新書、１９９２年）
『反戦と非暴力ー阿波根昌鴻の闘い』（亀井淳、高文研、１９９９
『写真記録　人間の住んでいる島』（阿波根昌鴻、１９８８年）